

---

# 居候日記

ガラスの靴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

居候日記

### 【Zコード】

Z9770D

### 【作者名】

ガラスの靴

### 【あらすじ】

今、私の目の前には1人の男の子が横たわっている。……なんやねん。ある大学生とある高校生のあんまり普通じゃない出会いです。短編読切。

## (前書き)

この小説は短編小説です。  
ですが、緻密なプロット設定などはなされていません。  
そのため、非常に展開の面白みに欠ける出来となつております。  
それでも構わないという方のみこの先へお進みください。

訳が分からぬ。

今、私の目の前には1人の男の子が横になつてゐる。

ちなみに私には生まれてこのかた彼氏などというロマンティックな響きをもつた異性などおりず、彼氏でもない男を自宅である2階建てアパートの1室に招待するような神経はしていない。

よつてこの状況は私の意志を無視して進んでいるところになる。

なぜこんなことになつたのか、私は記憶を1時間前まで遡らせることにした。

「瑞穂、あんた本当にこのままでいいの？」

「何が」

大学の授業が終わり、サークルに入つていない私はすぐにバイトへ向かおつとした。そこに旧友の邪魔に入る。

「だーかーらー！ そんな青春をドブに捨てるような生活でいいのかつてこと！」

「ああ、そんなこと」

確かに、大学の授業とバイトの他に若者的な遊びはあんまり、といふか殆どしたことがない。サークルもカラオケもなし。今こんなんて彼岸の世界だ。

「そんなんじやねえ！ いつかどつかに就職して、出世とかは出来ても、『瑞穂さんて仕事しか考えてないよね』とか言われていつまでたつても彼氏が出来なかつたりするのよ！」

そんなもん知るか。

「バイトしないと学費払えないんだから仕方がないでしょ。だいたいバイトだって青春らしいし」

「甘あーーい！… 今どきバイトなんかで彼氏が見つかると思うな

！ そういうところで見つけたいい男ってのは大抵ろくなしか誰かのツバがかかつてゐるのよ！」

「はいはい。それじゃああんたは青春を満喫してなさい。私はバイトする」

「ああ！ ちょっとお！？」

後ろでぎやーぎやー騒ぐ旧友をほつたらかして大学を出る。今日は少し時間に余裕があるから一回家に帰つて着がえようか。

春が来たといつても、やつぱり寒い日は寒く、今日なんかは冬の再来とまで言われる気温だつた。出来ることなら今すぐ温かいお風呂に入つて寝たいところだが、そんなことをするわけにはいかない。

「……ん？」

私が一人暮らしをしているアパートの近くに来ると、知らない人がアパートに入つていこうとしていた。

「……誰か新しく入つたのかな」

ここは田舎のおばあちゃんたちが住むところではないのだ。付近住民の入れ替わりなんていちいち気にしているれない。帽子のせいで顔もよく見えなかつたし、もしかしたら知つてている人だったかもしれない。

「さーて、とりあえずこたつであつたまるかー」

ポケットから鍵を出しながら2階にある私の部屋まで行く途中、そんなことを思う。我が家の中無休フル稼働なこたつはこの前大家さんが捨てようとしていたのを貰つたもので、見かけは少々ぼろいが一応の働きを見せている。

階段を上りきると、さつき入り口で見かけた男が私の部屋のすぐ前に立つていた。

「あれ？ 私に用事？」

男は落ち着かない様子だつたが、2、3回深呼吸をすると思い切

つた様子でノブに手をかけた。そのまま回すとすんなり開いた。

「ちよちよちよつと、あんたなにやつてんのー?」

「え! ?」

鍵が開いてたからって、いくらなんでもノックくらいしろ。私が近づくと、男は焦った様子であちこち見回した。

「私に用事? だつたら用件くらい聞くけど」

「い、いえ! なんでもありません! 失礼しま

ドスン。

落ちた。

「……は?」

下を覗き込むと、男がうつぶせに倒れていた。ビリヤリバツつかつた手すりが老朽化の影響でとれてしまつたらしい。

「……なんなのよ、もう」

大家さんのところに行つても誰もいなかつたし、このまま放つておくと落つこちた手すりとかの関係でいづれ私の部屋に用事があつたとばれそうだ。仕方なく男のところへ降りていぐ。

「もしもーし、生きてる?」

「……」

……返事がない。ただの屍のようだ。

「じゃなくて」

住んでる人なら楽なのになーと思ひながら帽子を取る。

「……誰これ」

それは男の子だつた。

体格的にはたぶん高校生くらいだらう。なかなか可愛い顔をしている。

だが残念ながら可愛い顔をしていれば問題が解決するわけではない。

「……どうしよう? ……」

私は、ひとまずその男の子を引きずつて部屋に運び込むことにした。

「……うーむ……」

振り返るのは最後の10分間でよかつたなと思いながら、自分の  
とつた行動を反省する。

「なんで部屋に入れちゃったんだろ……」

要はこの男の子と私の住むアパートとの関連性をなくせばよかつ  
たのだ。

例えば道路のすみにでもポイと放り出してしまえば、手すりの落  
下はただの老朽化ということで処理されてしまう。

「私、完全犯罪向いてないのかも」

自分の犯罪適性を分析していても意味がない。ひとまず今の計画  
を実行に移してみよう。

「……う、ううん……」

「あ、起きた」

ついでに言えば運もなかつたようだ。

「……あ、あれ……？　ここは……？」

「私の部屋よ。あんた前でウロウロしてたじやない」

「……え？　そ、それじゃここは、あなたの部屋？」

さつきそう言つた。

「あ、あ、あの！　失礼しました！　つて、うわあー…？」

男の子は慌てて飛び上ると、すぐさま逃げ出そうとした。足を  
かけて転ばせ、動きを封じてから尋ねる。

「まあ待ちなさい。なんで私の部屋の前で不審な動きをしていたの  
か説明するのが先よ」

「え、い、いえ、その……！」

最近は盗聴やら盗撮やら個人情報漏洩やらで安心して一人暮らし  
も出来ない。らしい。

「まさかあんた、空き巣？」

「……す、すみませんでした！」

……「ん。

「え？ まさか本当に？」

「……お金がなくて……」

面倒なことになった。私の部屋に空き巣が入る「としたのも気持ちが悪いが、これから警察になんていつたら色々と事情を聞かれて今日のバイトに遅れる事は必至だ。

「……はあ……」

「「」、「めんなさい。その、僕、鍵を開けたり出来ないので、ドアノブを回して開いていたら中に入らうと思つていたんですけど……」

「はあ……？」

どうやらとんだ間抜け泥棒だつたらしい。いやまた、それに空き巣に入られそうになつた私はもつと間抜けなのか？

「なんで私の部屋なのよ」

「いえ、その、適当にその辺の家を回つてました……」

「どのくらい」

「4軒くらい……」

つまり少なくともその4軒は鍵が閉まつっていたわけか。防犯意識がしつかりしていくいいことだ。

「それで、私の部屋が開いて、だけど私が来た、つてこと……」

「どれだけ偶然が重なればこんなことになるのやら。」

「あの！ 本当に「めんなさい」、僕、何でもします！ だからどうか警察には言わないで下さい……」

私も出来ればそうしたい。

「警察にいったところで未遂に終わりそうだしね……」

「そ、それでも警察はダメなんです……」

まさか脱獄犯とかじゃないだろ？ な。

「警察に行つたら……叔父さんが……」

「おじ？」

叔父さんが警視総監とか？

「とにかくお願ひします！ どうか警察には……お願いします！」

「わ、わかつたわよ。言わなきやいいんでしょ言わなきや」

「あ、あ、ありがとう……」「やれ……」

「ちょ、ちょつと……なんで泣くのよ……？」

「すみません……安心したら……その……」

「なんなのよ、もつ。

「もう大丈夫です……。落ち着きました」

「そう。じゃあ帰れ」

「なんで空き巣と我が家で和まなければいけないのだ。

「あ、そうですね。それじゃ、本当にありがとうございました」

私もバイトに行くため部屋の外へ出る。

「せつかく見逃してやつたんだから、もうやるんじゃないわよ」

「……はい。わかりました」

男の子はペコペコ頭を下げながら帰つていった。私もとんでも人よしだ。

「それにしても、叔父さんがどうしたんだろう

少し気になるが、それよりもバイトだ。遅刻する。

バイトも終わり、家に向かって歩いていく。安全を考えたらバスを使うべきだろうが、どうせ徒歩と10分くらいしか変わらないのだ。210円と天秤にかけたら歩く労力が勝る。

「寒い……」

夜。そして風。この極悪コンボは容赦なく人の体温を奪つていく。やつぱりバスでも良かつたかもしぬ。

……！

夜は遠くの音がよく聞こえるようになるらしい。そして聞こえてしまったものはしょうがない。

「今日は厄日か……！？」

叫び声のする方向まで行くと、どうやら不良グループがカツアゲをしているようだ。叫ばせるなんて詰めの甘い。

「ちょっと、なにしてんの」

「あ？　いや、お小遣いを借りてんだよ」

「お姉さんも貸してくれないかなあ？」

バカの一つ覚えのように金々言つ不良グループに携帯電話を見せる。

「110、押しといたから」

「な……！」

「余計な真似しやがつて！」

国家権力の犬にも勝てないばか者たちが負け犬の遠吠えを聞かせながら逃げていく。

「それだけで逃げるあんたらはどうなよ……」

最近の若者はだらしない。どうせやるならもつと気合を入れてカツアゲしろ。

「で、被害者は……」

前言撤回。カツアゲではなかつたようだ。

「これじゃ強奪じゃない……」

その人は殴られ蹴られ、見るも無残な姿になつていた。慌てて起こす。

「…………あんた…………」

「…………あれ…………？　どうしたんですか…………？」

つづづく不運な男の子だった。

「それで、悲鳴を訊いて駆けつけたら、あの少年が倒れていたと？」

「ええ。他には誰もいませんでした」

「面倒くさい。

とりあえず救急車でも呼ぼうかと思ったら、どこかの愚か者が悲鳴を聞いて警察を呼んでいたらしく、私も強制連行の目にあつた。

「ふうん……ホントにあんたがやつたわけじゃないんだな?」「しつこいですね。私のようななか弱い女性になにができるっていっていいんですね?」

「…………」

「あ、ドン引きしてる。せめて突っ込め。」

「…………ゴホン。わかつた。それじゃもう帰んなさい」

「あの、あの子は?」

別の部屋で事情を聞かされていると思うのだが。

「ああ、あの少年か。彼は捜索願が出されていたから、これから保護者に引き取つてもらひつよ。」

「…………え…………?」

「捜索願?」

「あの、それってどういつ…………ー?」

「あなたには関係ないでしょ。まあ帰つた帰つた」

「いや、あの、ちょっと」

「大変です署長! 少年が逃げ出しました!」

「…………な、なんだとう! ?」

「この人、署長なんだ。いやそんなことはどうでもいい。それじゃ帰りますね。お世話になりました、無駄に」「あ、ちょっとあんた…………! 待ち」

なんとなく早足でアパートへと向かう。

「まさかとは思うけど…………」

大学から電車で30分。さらにそこから徒歩で20分。ようやく見つけた激安アパート、その203号室。その部屋の前に、あいつはいた。

「…………訴えるわよ?」

「…………ごめんなさい…………」

謝るくらいなら警察はいらぬっての。

「とにかく逃げなきゃって思つて、それで、がむしゃらに走つて…  
…気がついたら、ここに来てました……」

「私の家はあなたの避難所じゃないんだけど」

「『めんなさい』……」

とりあえずいつまでもこんな寒空のトジヤ凍えてしまひ。私は部屋に入るついでに男の子を入れてやつた。つこでこ。いい重要。

「あんた、家出か何か？」

「え？」

「搜索願が出てるんでのこ、逃げ出すなんて。家出じゃなかつたら

ただのバカね」

「……すみません……」

だから謝るな。

しばらくの間、お互に無言で座る。

「……あの、あなたは一人暮らしなんですか？」

「そうよ。悪い？」

「……ご家族の方は……？」

「……」

普段なら絶対に答えない質問。

訊いてきた奴とは暫く口もききたくなぬほど嫌なその質問に、今  
の私はどうしてか素直に答えたくなつた。

「逃げてきたのよ」

「……え……？」

「逃げてきたの。宿家だかなんだか知らないけど、生まれたときから将来が決められてるような家なんつうござつ。だから、高校卒業と同時に飛び出してきたの」

我ながら子供じみてると思つ。

そんなことをするから余計話がこじれるのもわかってる。  
けど、そうなつてしまつたからにはしようがない。

「それで半年とちょっと、うまくやれてるからいいけどね」

「うまく……ですか？」

男の子が部屋を見回しながら言ひ。

「……なんか文句ある?」

「い、いえ! ? なんでもありません!」

部屋が散らかつてて悪かつたわね。

「……そのご家族の方は、心配してないんですか?」

「知らないわよ。どう調べたのか知らないけど手紙なんて送りつけてくるわりに迎えにも来ないんだから、どうでもいいんじゃない?」

「……そう、なんですか……」

再び静寂。

「……僕の親は、小さい頃に死んでしまいました」

「……え?」

「それで、叔父さんの家に引き取られたんです」

叔父さん。

その響きだけが、何故か冷たく感じられた。

「そこでの生活は……まあ、楽しくなかつたわけじゃないんです。友達も何人かはいましたし」

そこから先の話は、テレビなんかでよく聞くものだった。

家庭内暴力。

虐待。

育児放棄。

「……まあ、育児なんて歳じゃないですけど」

ハハツ、と悲しそうに笑うその横顔は、とても寂しげで。

「……それで、逃げ出してきたの?」

否定しないその表情が、全てを物語ついていた。

「それにもあんた、どこから来たの?」

「え? 青森ですけど」

「……は?」

いま、青森とおっしゃったか。

「……ここがどこだかわかつて?」

「東京ですよね」

「…………」

「確かに、ちょっと遠くまで来ちゃいましたね」

今すぐ『ちょっと』の意味を辞書で引け。

「まったく、そんなんじゃ泊まるところを探すのも大変でしょう……はい……。おかげで公園の盥わんと仲良くなれました……」

「じゃ、また会いましょ」

「ああ!? そんなあからさまに追い出さうとしたしないでください……いやなんか、イメージ的に臭い。

「だ、大丈夫です！ きちんと体は洗っています！」

「そんなこと改めて言わなくていいから。

「わかったわよ」

「はい?」

「もういいじままで来たら何かの力が働いてる」としか思えない。

「泊まるところがないんなひ、今晩だけは泊めてあげる」

「…………え、あの…………」

「…………何？ あてがあるなり今すぐ追い出すけど」

「いえ！ あの、お気持ちはずごく嬉しこうですが…………その、大丈夫なんですか？」

普通そつちから訊くか。

「まああんた弱そうだし。柱に括り付けとくし」

「…………そうですか…………」

嘘だつて。

「まああんたの気持ちも分からなくもないし。同じ家出仲間のよしみよ」

「…………あの、あなた…………」

「瑞穂」

「…………え?」

不思議そうな顔をして見上げる男の子。

「名前。あんたは?」

「え? ……えつと、優希<sup>ゆうき</sup>っていいます

「…………」

女の子でもいけそうな名前だ。

「…………それで、あの…………」

「何よ、まだなんかある

「説小治政」

「おにがどん」  
立派な二つ巴

泣くなといふは！」

卷之三

「もぐら」の

「あ、あのつ！」

優希は後ろを

た。

「ありがとう」

「」

۱۰۷

本邦はJの恩は一生忘れません!「

- 1 -

「なぜ？」

「やかましいーーー！」

「えええええええー!?

優希を殴り飛ばして逃

「まあまあ！」

あへなはー。

あれはない

..... 反照でし、

ああ、これは好みじゃないって思ってたけど

なんというかその、笑顔が。

「眩しそうだな」

もうダメだ、自分。

結局夜中はほとんど眠れなかつた。

明け方になつてよしづへせりよひなつたとゆつたり田原ましの音。

「…………ん？」

わづ今日は大学サボつて寝よつとかと思つてこると、おかしな感覚。なんとこうか、いい匂いが。

「あ、起きましたか？ 瑞穂さん」

「…………なに……つて、あああああんたあ！？」

「う、うわあ！？」

慌てて布団を跳ね除ける。やじにせ、何故かエプロン姿の優希と、何故か湯気を立てている朝食があった。

「…………なに？ これ？」

「ええっと、これからお世話になるのだから、せめて『飯くらは』と思いまして……」

「は？ これから？」

「はい！」

ちよつと待て。私は『今晩だけ』と言わなかつただろうか。いや、言つた。確かに言つた。

「あんた、ちよつと誤解してゐみたいだけど、私は

「瑞穂さん、目玉焼きには何をかけますか？」

「いやだから泊めるのは

「僕はお醤油なんですよ。瑞穂さんもどうですか？」

「いじからひとつと出でけ

「あ、そうだ！ 瑞穂さん、一度食べてみてください……。ほりー。

あーん！」

「あ、ちよ、待つ

パクリ。

「…………」

「どうですか？」

「…………もうちょっと塩分控えめの方がいいわね」

「えうですか？ じゃあ今度そういうお醤油を探してきます！

駄目だ、勝てない。

私はこの時、これから続く生活が長い長いものになるんだなど確  
信した。

「ほら瑞穂さん、早く食べましょー!」

(後書き)

初めての方は初めまして。  
そうでない方はお久しぶりです。  
ガラスの靴でござります。

この話は個人的事情で課題の作成に追われている中、「やつてられるか」と半ば自棄になつて書いたものです。  
そのためなかなか突つ込みどころ満載。

あえて自分から突つ込むと、単に厄神様の逆バージョンといえなくもないお話ですね。

ですが、この世界には幽霊とか神様とか妖怪とかはいよいよつたりするかもしれません。

今回の話は読み切りとして書いたので続きは特に予定していませんが、どうしようかと思っているうちに脳内の登場人物が増えてしまつたのでまた気が向いた時に続きをできているかもしれません。できていませんかもしません。

というわけで、いかがだったでしょうか？

感想など送つていただけると作者が小躍りするので、そういう反応を見て愉しみたい方なんかも感想を書いてみるといいのではないでしょうか。

ではでは、読んでいただきありがとうございましたー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9770d/>

---

居候日記

2010年10月8日15時21分発行